

円地文子全集 第十一卷

817

田下文子全集

第十一卷

新潮社

第十三回配本(全十六卷)

田地文子全集 第十一卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年九月十五日 印刷

昭和五十三年九月二十日 発行

著者 田地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一

業務部 東京(〇三)二六六一五一一

電話 編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文子全集 第十一卷 目次

賭けるもの
あざやかな女
解題

491 358 7

円地文子全集 第十一卷

賭けるもの

小さい悪

横須賀線のホームの階段の下まで来た時、発車のベルが鳴り出した。一電車後^{おそ}らしても、どうということはないのに、やっぱり美音^{みお}は駈^{かけ}け登^{のぼ}って、中頃の一等車に滑り込むのと、殆ど同時に扉が閉り、車体は一揺れして動き出した。美音は大事に抱えて来たセロファン包みのかさばった花束と菓子折の風呂敷を、棚に上げようとして見上げると、そこには向合いの客のものらしい、帽子やレインコート、折靴などがばらばらに場をとっていた。

日曜の午後三時頃のこと、車内は空いていたが、向いあった座席の四つながら空^かの場所はなかった。美音のかけようとしている席には中年の男が一人腰かけていただけであつた。

「すみませんが、少し片よせてよろしいでしょうか」

ときくと、その中年男は鈍い動作で立上り、にやにや笑いながら棚の上の荷物を一括めにした。何で笑い顔をつくるのか美音にはわからなかったが、平たい顔の薄く大きい唇の不確かにひろがり、笑っているのが何となく卑しく眼に映った。

「今日は……」

窓際に腰を落ちつけて間もなく左手に浜離宮の青葉を溢らせた森の見えるあたりで、美音は声をかけられた。

「あら、隆吉さん……乗ってたの？」

「そうだよ、君があたふた駈込んで来たのをあっちで見えていたのさ……鎌倉へ行くんだらう……」

隆吉は美音の隣に腰をおろしながら言った。

「ええ、そうよ」

「それ、お祝いの花束かい？」

隆吉は棚を見上げて言った。

今日七十八回の誕生日を迎える老工學博士貝塚弥彦には

美音も隆吉も孫に当る……隆吉は弥彦の長男の末息子だし、

美音は三番娘の千賀子の嫁いだ先の子なので、年は三つ隆吉が上の従兄^{いとこ}同士なのである。隆吉は祖父の創立した貝塚工業会社に一昨年から勤めていた。

「ええ、ママに頼まれたのよ。ママ、昼の結婚の御披露にお呼ばれしていて、そこからまわるから、お花やお菓子持って行かれないっていうの……私、蠣^{かき}殻^{がら}町の三笠堂まで行って、羊羹^{ようきやう}巻^{まき}買って来たのよ」

「何だい三笠堂って……」

「あら、隆吉さん知らないの……東京で随分古いお菓子屋なんですって、……お祖父さまは昔から生菓子はお好きじゃないけど、三笠堂の羊羹巻^{ようきやうまき}だけは、上るんですって……」

「和菓子じゃ、興味ねえな」

隆吉は学生言葉で言ったが、

「それにお祖父さん、胃^い癌^{がん}だろう……いいの、そんなもの持っていて……」

と心持ち眉根をよせて小声で書いた。

「それがねえ。何でも食べられる内にお上げなさいって、お医者さまがおっしゃるんですって……今ところは調子がいいらしいのね……一昨日^{きのう}ママが電話した時に、お誕生祝いに何を持って行きましょって言ったら、三笠堂の羊羹巻^{ようきやうまき}って向うから御注文だったんですって……」

「ふうん……」

隆吉はうなずいただけだったが、祖父の病気に医者にもう匙^しを投^なげているのだと思った。祖父の会社は現在、隆吉には叔父の貝塚恭介が社長になって充実した発展ぶりを見せているから後顧の憂いはないようなものの、矢張り貝塚弥彦が死んだとなると、対外的にも微妙な情勢の変化は来るだろうと隆吉は想像した。貝塚一門の彼とすれば、他事にはすまされない問題であるが、今日の彼はそれ以外にも祖父の死について気になることをきいていた。

「お祖父さん、自分の病気に気がついてるんだらうか」
言いながら、隆吉の頭には遺産、遺言書などという言葉がテレビの画面を横切る臨時ニュースのように滑りすぎて行った。

「さあ、どうなのかしらん……私もここところ鎌倉へはあんまり行かないから……でもママも解らないって言ってたわ。お祖父さま、何にもおっしゃらないらしいわよ。……まあ、普通だったら……つまり第三者のことだったら、わかってるのが常識だっていうの。お祖父さまは殊に勘の鋭いので有名な方でしょう」

「わかっていても言わないのかしらん……」

隆吉は窺うように美音の顔をみて言った。美音と話している時、判断を美音に求めるようになるのが彼の癖であった。こっちが年上なのにおかしなことだと思いがら、隆

吉はそれを自分の美音に向けている恋愛感情のある種の表現だとして肯定していた。

「さあね……わかんないな」

「しかし、もし、お祖父さんが誰にも言わないだけで、自分の死の近づいていることを知っているとすれば、遺言状ぐらいい書いている筈だね。事業の面でも家族関係についても、死んだあとでこうして貰いたいってことはあるわけだろう」

「そうかしら……」

美音は大して興味なさそうに言った。

「あなたとこのパパと恭介伯父さままで相談すれば、貝塚家のことは何でもすらすら滞らずにうまく行くって、うちのママなんか信じているわよ。お祖父さまもそう思って、遺言状なんか書いて置かないんじゃないの……」

「うん、僕もそんなことだろうと思っていたんだがね……」

隆吉はそこで迷う風に言葉を切った。

「何なの？」

美音の方が彼の言い淀んだ気配にひっかかって問いかけて来た。

「何かあるの？」

「いや、別に大したことじゃないよ」

隆吉は首を振って見せた。

世間に名の通った一族として、隆吉にはいつも他人の眼や耳を気にする小心さが身についていた。今も、前の席に腰かけている、ワイシャツの衿の萎えた中年男を意識に入られて、そう答えたのであるが、美音は、彼の躊躇に好奇心をそそられたのか、

「事業のこと……それとも家庭の事情？」

と彼の否定を押しつけて聞きかえして来た。

「事業の方じゃないよ……家庭の事情……さあ、それともちょっと違うようだが、まあ、あとで話して上げるよ」

「ふうん……いやに気を持たすのね」

美音はそれでも、隆吉の言葉を切った意味が呑みこめられしく、それ以上問いかけようとはしなかった。

ミロのヴィーナスを見ようと思って上野まで行ったが、行列の長さに辟易して帰って来てしまった話だの、ペルーのサッカー競技で人死にの出した騒ぎだのについて話している内に電車は横浜を過ぎた。

梅雨時を前にした若葉の鮮やかな緑が保土ヶ谷あたりからめっきり治道に濃くなつて来て、都塵に疲れた眼を快く潤してくれる。

保土ヶ谷を過ぎたあたりで、検札の係員が来た。

美音と隆吉のさし出した切符に、鉄を入れてから、乗務員は、向いの席の中年男の方に向いた。

中年男は先刻美音に見せたのと同じような曖昧な笑いを

口もとに浮べながら、ポケットから、定期らしい券を出して、

「横浜から……」

と言った。

「北鎌倉まで……」

「百十円です」

男が小銭を揃えて出すと、車掌は無表情のまま、受取って行ってしまった。

男はゆっくり、定期と財布をポケットにしまい、急に睡くなったように眼をつぶったが、眩しそうに瞬きして頭をシートの背に置き替えた。眩しい筈であった。

彼が横浜からと言って、定期券を車掌に示した時から、前の席で、美音はくっきりした二重瞼の黒い瞳を見張り、今にも呼びかけそうに唇を蠢かせて、凝と彼の顔を見ていたからである。

美音は東京駅で自分より先にこの男が乗りこんで、車席を占領していたのを知っている。彼は卑屈な笑い方で、スチール棚の上の自分の荷物を片よせたが、あの笑いの中には、二等の定期で一等へ乗っているうしろ暗い会釈が、含まれていたのか。

しかし、美音を不快にしたのは、不正乗車それ自身ではなくて、その男が不正乗車をしている事実を、自分と隆吉とはっきり示しているながら、完全に二人の存在を無視し

て行動したことについてなのであった。

ひどい話だ。この人は私たちをまるでそこにいないのと同じように無視したのだと美音は思った。

容貌にも才能にも自信のある若い美音にとって、何によらず他から無視されることは完全に侮辱されたことである。美音は自分の前にぬっすり腰かけている萎えた身なりの男に敵意を感じた。

車掌さん、この人はほんとうは二等の定期で東京駅から乗って来ていたんですよ。そう告げてやりたいのに、その言葉は咽喉へ引かかって出て来ない……それが無遠慮に他人の行動へ立入って行けないたしなみを身につけている為だとわかってはいるほど、美音は一層じれったい憤りに煮られた。

隣の隆吉の脇腹を軽く肘で突いてみたが、彼は殊更、無関心を装って、眼を窓の外の赤土の崖にあずけている……いや、それだけではなくて、美音が見かけによらぬ一徹な癖を出して、とんだおせっかいを言い出しては大変だと、そっと頷を動かして、構うなという身ぶりをして見せた。

電車が北鎌倉で止るすぐ前にその男は今眼のさめたように立上り、大急ぎで棚の荷物を一括めにして降りて行った。

「ちえっ、東京から横浜までごまかしやがった……凶々しい奴だな」

電車が動き出してから、隆吉が言ったが、美音は黙って

いた。不機嫌が一ぱいに顔を蔽っている。

隆吉もそれっきり黙った。

鎌倉の駅で降りて、表口へ出たところで、隆吉は立ちどまって、

「タクシーで行く？」

ときいた。

「ええ」

と美音は答えて、タクシーを拾った。

「浄明寺の近く……華の橋ってバスの停留所のちょっと入ったところだ」

タクシーが動き出すと直ぐ、右手に八幡宮の段かずらの外れが見えた。

「私は、考えていたのよ」

と美音がぼつんと言った。

「何をさ……今の変な男のことかい」

「そう……あの男、私と隆吉さんを全く無視したのよ。不正乗車ってことを私たちは知っているのに、まるで自分の仲間みたいに平気な顔していたわね。私、車掌に注意してやりたかったけれど、それが出来なかったの……私、そのことに腹を立てているのよ」

「怒ることはないさ……あんな程度のことよくやるやつがいるよ。検札に出来ない車掌が問ぬけなんだ……かかりあったら、こっちが恨まれるよ」

「そうよ、恨まれたり憎まれたりするわ。私はそのことを思うと怖くって言えなかったの……それは卑怯だからだと思ふのよ。でも黙っていたことで、潔白にはならないわ。」

私たちはあの男のやった不正に協力したのよ。共犯だわ」

「共犯だなんて……君の言い方は……いや考え方はいつもオーバーだよ。あの程度のこと……」

隆吉が言おうとするのを、美音はさえぎった。

「程度の問題ではないの……私、あの男に無視されたこと……つまり、侮蔑されたことが我慢出来ないのよ。そりゃ、あんな程度の不正乗越しなんかやる人はいくらもあるわよ。半子供時代のには、あんな悪戯いんぎずをして大人をからかう気分は誰にでもあるわ。でもね、あの人は生活の垢が一ぱい身体についている中年男だったわ。自分のしていることが不正だという常識は持っている筈よ。それなのに、私たち二人を全然無視して、車掌と話していたでしょう」

「これは自分と乗務員との間のことだ。他人には関係ないと思っているんだろう」

「でもそれは違うわね。私たちは自分の支払った乗車賃に指定された席に乗る筈でしょう。あの人はその規則を破っている点で、私たちにも無関係ではないわ」

「理屈はそんなものさ」

隆吉はちょっともて扱った感じで言った。車は八幡宮の前を右に曲ったところで、青葉に囲まれた石段の上に丹塗

りのけばけばしい社殿が見えた。

「だけど、普通はあの程度のことは、こっちには直接、無害だとして、無視するのが常識だね。君の議論で押して行くと、あの男を警戒するか、あの男を告発するか二つになるだろう。警戒は坊主か牧師に委せればいいし、告発は自分が相手とはつきりした新しい関係を持つことを覚悟しなければ出来ないよ……結局、われわれの常識はわれわれに、その二つの権利を棄権しろと教える……」

「そうね、たしかにそういうことね」

美音はうなずいて見せた。

「今、隆吉さんの言った新しい関係ってことね。言いかえれば、あの男の軽犯罪を私が摘発することによって、生れる二人の間の関係ね。それは全く新しい事柄で、憎しみとか、怨みとか毒々しい味が交っているに違いないわ。……私、あの男とそういう関係を持つことが怖かったの……それと一緒に、それを怖がっている自分が卑怯で厭でたまらなかったの」

「当たり前じゃないか。人間には、自己防衛の本能があるんだよ。あんなくらいのことで、赤の他人と敵意のある関係なんか誰だって持ちたくはないよ。君、知らないのか……拘摸くもだって、盗まれた本人に撫なまると、諦めるが、他人が注意したりすると、猛烈にその教えた人間を憎んで復讐するということじゃないか。今の男なんか、大した人相もしてな

かったけれども、それでも君か僕が車掌にこの人は東京から乗ってたなんて言えば、間違いなく怒るに違いないね」

「そうだわ。そうよ……」

美音は自分にいうようにうなずいて、
「そのことをつまり、私は怖れているし、同時にもしかがってもしるんだわ。……だって現に私はあれ以来、あの男の顔が頭に張りついているんですもの……私は彼を憎んでいるし、同時に彼のやったことを見過した共犯者なんだもの……」

と言った。

隆吉は笑い出して、
「大袈裟だよ。君は先刻さつも僕があんな程度のことって言ったら、怒ってたけど、程度というのは大切だよ。僕は一昨年から、サラリーマン生活を始めたけれども『程度』という計算尺を持っていなかったら、危険で世の中は歩いて行けないと思いはじめたよ」

と言った。

「ふふ」

美音もはじめて、張りつめていた頬を崩して微笑んだ。
そういう時、怒った猫のように、はみの切れ上った顔が、急に花びらのように軟かに綻びる変化が、いつまでも少女らしくて、隆吉は美音を美しいと思った。
「隆吉さん、今日はいやにお説教するわね。お年のせい

な」

「お年よりも、浮世の埃が身について来たんだろう。君みたいに、単純に、怒れないんだよ」

「単純かしらん」

美音は首を少し傾けて言った。

「そうね、単純なんでしょうね。私がよく色んなことに憤慨すると、ママが困ったり、不思議がったりするの……例えば、今の男のことだって、ママに話せば、飛んでもない……女の子が、そんなことに口出ししたりして、因縁つけられたらどうするのって、叱られるに極つてるのよ」

「そりゃそうだよ。君のような勇猛果敢な娘を持った千賀子叔母さんに僕は同情するな」

「勇猛果敢にやれないから、むんむんするんじゃないの……先刻の男だって、いきなり殴りかかってでも来たら、私、敵わないもの……女って厭だわ。ほんとうに……」

「しかし告発っていうのも、上品なことじゃないだろう。

卑怯ってことだけでは説明しきれない問題があるよ。ああいう時、この人嘘を言ってますなんて、君がずばりと車掌に言ったとすれば、尠なくとも、僕は君をいやな女だと思ふな」

「そう……それもあるのよ。男だってそういうことを、平気でやれる人には私、不愉快を感じるわ」

「そうだろう……じゃあ、結局、触らぬ神で通すより方法

はないじゃあないか」

「堂々めぐりね。だけど、不愉快なのだけは確かよ」

美音はもう一度、厳しく唇を結んだ。

ある誕生日

大塔宮の土の牢へ行く道を左に見て、綺麗な水の滯らずに流れる川の縁に沿ってしばらく行くと、宅間ヶ谷の入口に出る。そこには華の橋と優美な名をつけた橋がかかっていて、それを渡って行った先一帯が宅間ヶ谷であった。

鎌倉に多い谷戸の一つで、最近の住宅激増に伴って、新しい家も可成り殖えているが、両側のなだらかな山の稜線に区切られたこの谷間には、小川の水の流れの音が爽やかに聞かれるほどの静かさがまだ保たれていて、青葉の緑の滴のような鮮やかさも格別である。

貝塚弥彦の邸は、橋から一町ほど入った、だらだら登りの中途に、庭の山を背にして建っていた。昭和のはじめ頃に、土曜日曜だけをそこで過す目的で買った家を、戦後に建て直したもので、弥彦はここ七、八年東京での実務を次男の恭介に譲ってからは、この土地に住みついていた。

老妻には数年前に先立たれたが、長女の静子の家族が地内の別棟に住っているので、弥彦の身の周りの世話には事欠かないのである。

隠退していても弥彦は世間の声望も高く、貝塚一門の総帥なので、誕生日には例年、数多い孫たちや親戚の他にも友人や後輩まで招いて、賑やかに宴を張るのが恒例であったが、今年の誕生日は、祝われる当人が健康を害しているからという理由で、極く内輪の者だけで集ることにしたのである。

それでも美音と、隆吉がタクシーを降りて門を入って行った時には、いろいろな種類の竹を植え込んだ特色のある前庭に、二台の自家用車が駐っていた。

「ああ、恭叔父さんの車が来ている……」

と隆吉は言って、六十四年型のベンツの傍に立って、車体に羽根ばたきをかけている運転手の方へ歩いて行った。

「白坂さん……もう来てるの……随分早いんだね。ゴルフの帰りだろうと思ったんだけれど……」

「それがね、今日はおやめになったんですよ。そら、民政党の小野さんが亡くなったでしょう……あれで番狂わせになって……社長もお悔みに行かれて、それからこちらへいらしたんです」

中老の運転手は叩きの手を運かしながら温和に言った。

「ああ、そうか、そうか」

と隆吉はうなずいて、

「われわれは上層階級の動きには無関係だからね……」

「御冗談でしょう」

白坂はたっぷりした頬に笑い皺をよせて、

「常務さんも御夫婦で今し方いらっしやいましたよ」

と隣の車を指して言った。

「このぶんじゃ、うちのママが一番遅刻らしいわね」

美音はダスターコートを脱いで腕にかけながら言った。

下にはシルクトリコットの淡い鮭色をボレロ附きに仕立てたカクテルドレスを着ていた。グレーのコートが剥がれたとたん美音は急に変った女になったように華やかに、筒型の首や、白く光っている腕の若々しい美しさをむき出しにして、隆吉をうっとりさせた。胴がまだ少女らしく蜂のように細いのに、乳房のあたりが快い張りを持って、ドレスの胸の大きいくりの縁が、そのふくらみを軽く抑えているようなのが、殊に隆吉の心をときめかせた。

こんなふくよかな美しい肉体を持つ娘が、先刻のような小骨の多い理屈をこねるのは不似合いなことだと隆吉は思いながら、美音と連れ立って、玄関へ入って行った。

「まあ、まあ、隆吉さん、美音さんも一緒だったの……」

お祖父さまもいい工合に今日は調子がよくってね……今も庭へ椅子を出して皆さんと話していられしやるところよ」

ホステス役の伯母の静子が玄関に出て来て、若い二人に似つかわしく応対してくれた。

美音が母の後れることを言って、花と菓子を渡そうとすると、静子は手を振って、